



TITLE:

「戦前戦後に於ける國富統計」を
讀みて

AUTHOR(S):

汐見, 三郎

CITATION:

汐見, 三郎. 「戦前戦後に於ける國富統計」を讀みて. 經濟論叢 1922,
14(2): 419-420

ISSUE DATE:

1922-02-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127867>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 二 號 第 十 四 卷

大正十一年二月一日發行

論 叢

最低生活費免稅論

法學博士 小川郷太郎

植民政策是非

文學博士 原 勝 郎

小作制と小作法

法學博士 河田 嗣 郎

經濟道と經濟術

法學士 作田 莊 一

海運に於ける競争と獨占

法學士 小島昌太郎

時 論

我邦消費稅の體系を論ず

法學博士 神戶 正 雄

說 苑

リッケルトの價值體系

文學博士 米田庄太郎

舊尾張藩に於ける地割制度

農學士 奥 田 彥

雜 錄

「戰前戰後國富統計」を讀みて

法學士 汐見 三 郎

「戰前戰後に於ける國富統計」を讀みて

沙 見 三 郎

一 國勢院は、機關雜誌「統計時報」の創刊號に於て、其調査にかゝる國富統計を發表してある、余は取り敢へず其結果を本誌に紹介して置いた。其後國勢院第一部の名に於て「戰前戰後に於ける國富統計」なる刊行物を發表し、其調査の更に詳細なる根據を示し、腹藏無き批評を求められた。卒直に所信を披瀝して、批評に代へよう。

大體次の如き順序を踏む。根本論として國富統計を國勢院が調査する事の可否、更に進んで國勢院の採用せる國富統計調査方法の是非、最後に、國勢院の調査方法を是認するとして、其國富の表示方法が果して妥當なりや否やの問題に及びたい。

二 先づ、根本論たる、國富統計を國勢院が調査する事のは非より始める。

國富統計其者に對しては、往々眞面目なる統計學者より、有害無益なりとの評が下されてある。國富統計を以て國力を反映せしむる唯一無二の標準とし、國富統計一本槍を以て社會萬般

の問題を解決せんとするが如き、確に統計の權威を疑はしむるものである。殊に政治家が國富統計を濫用し、失政を固途せんが爲めに虚偽の國富統計を掲ぐるが如き、最も慎しむべき事である。然し、此は國富統計の暗黒面のみを見た議論である、學者の純なる心を以て、周到なる準備の下に調べられた國富統計は、必ずや大なる實益を伴ふのである。

茲に問題となるのは、國勢院が他の更に重要な統計を棄て、此仕事に着手したのは、少しく不釣合でなからうかの點である。余も嘗て論ぜし如く、國民所得統計に第一次的の價值を附し國富統計には第二次的の價值を附するのが、現今學界の定説となつてある所である、然るに國勢院が、重要なべき動的の國民所得を棄て、靜的の國富のみを單獨に調査したのは、何故なりやの疑である。恐らく國勢院は、國際聯盟理事會事務總長よりの照會を其直接の動機として、先づ國富統計に手を染めたのであらう。此事たる、官廳の常として別に怪しむに足りない。只余の希望は——直接必要に迫られざる、而もより以上有益なる——國民所得統計の調査を、看過してはならぬ事である。

以上の理由で、國勢院が國富統計を調査した事は、別に有害無益でない、何れ遠からずして、國勢院の手になる國民所得統計が發表せられるであらうから、其を大に期待してある。

三 國勢院が國富統計を調査する事其自體を是認することし、次に起る問題は、國勢院の採用せし調査方法が正しきや否やの點である。

國勢院の方法は物的方法である、而して調査の範圍は單に私

1) 國富統計(統計時報第一號56-64頁)
 2) 拙稿:財産税と國富統計(經濟論叢第十四卷第一號224-225頁)
 3) 拙稿:219-220頁
 4) 國富統計 56頁「戰前戰後に於ける國富統計」2頁

有の富に止まらず官公有の國富に迄も及んでゐる。余は、寧ろ人的方法を採用し、中心を私有財産に置き、國富統計を作製したき希望を有してゐる。然し私有財産を中心とする人的方法を完成するに當つては、財産税が存在し私有財産の内容が明となつてゐる事を前提とするのである、従つて我國の現状にては、其實現が不可能なりと云はねばならぬ。

國勢院の調査の動機が國際聯盟よりの照會に出でたるものであり、旁々我國の事情が現在の如くである以上は、物的方法の採用も亦止むを得ざる所である。只財産税制定は恐らく時日の問題であらうから、大藏省主税局と協調を保ち、財産税制定の事前事後に行はるゝ私有財産の詳細なる調査を利用し、物的調査の不備を補ひたいものである。

四 國勢院が國富統計を調査する事を承認し、現實の物的方法の採用を必要止むを得ずとして、最後に起る問題は、國勢院の行へる國富統計の表示方法が果して妥當なりやの點である。國富統計の表示に二方法が存してゐる、一は物の統計、他は貨幣價値の統計である。國富の數量をQにて示し、Pを國富の平均物價指數とし、國富の貨幣價値をVとする時は、三者は

$$P \times Q = V$$

の關係に立つのである。國富統計に於て第一に重んずべきは實質上の國富Qであつて、名義上の國富Vは寧ろ第二義的のものである。即ちQにては統一的表示困難なるが故に、價値の共通分母たる貨幣を借りVを示した迄である。此區別は、國富の平均物價指數Pの變動甚だしき世界大戰前後に於て實益を見るので

ある。Vは恐らく何れの國に於ても増加したであらう、蓋し物價Pの暴騰が各國共通の現象なるが故である、然し我等の求むる所はQである、實質の國富の増減である。Bowleyは、貿易の實額Qの消長を示すに際し、貨幣價値Pの變動の影響を避くる方法として、一定年度の物價を標準として各年度の貿易總額を換算する方法を勸めてゐる。此方法は、夙に Economist 誌 (Econ.誌) にて用ひられ、現に東洋經濟新報の採用する所である。貿易統計に用ひらるゝ此方法を國富統計に適用せば、定めし實益が大であらう。

國勢院の調査は、國富の戰前戰後の比較を目的としてゐる、従つて其數字に對し世人の抱く期待は、戰前戰後の實質的國富を如實に傳へる點である。然を云へば、大正二年八年の國富の「貨幣價値の統計」を示すに止まらず、更に「一定標準年度の物價に換算したる戰前戰後の國富統計」がほしいのである。否少くともVに拂ふ同等の貨幣をQにも拂つて貰ひたいのである。然るに、統計時報に於ても「戰前戰後に於ける國富統計」に於てもVのみを高調しQを開却したるは、余の大に遺憾とする所である。

五 以上、簡單ながら、國勢院の調査にかゝる「戰前戰後に於ける國富統計」を批評した。

批評は易く、創作は難い、調査者の心勞を思ふ時余は深き感謝の念を捧ぐるのである。而も余が苦言を呈する所以は、國際的運動の進歩と共に益々必要を加ふる國富統計を、如何にかして完全の域に進ましめんと思ふからである。(一一、一二、四)

5) 拙稿：229頁

6) 拙稿：220頁

7) Bowley: Elementary Manual of Statistics, p. 118

8) 東洋經濟新報經濟年鑑 輸出貨物價格及數量増減比較表